

生き生きと育つ親

杉本 裕子

シンク口する育ち

こどもの成長と共に親も育つ、とはよく言われることである。しかし忙しく生活に夢中な毎日、こどもの変化には敏感であつても、自分自身にも同時に何らかの変化が生起していることなど思いも至らない。子育てが一段落したところなら、やれやれと振り返り、そういえば若い頃に比べて自分もずい

ぶん角が取れたな、とか、以前は教育行政に関する事柄など興味を持たなかつたのに、我が事として関心を抱くようになったなどの変化を確認することができるだろう。けれども子育ての最中に親が自身の何がどんな風に育ちつつあるのか、自覚することは稀ではないだろうか。

しかし、こどもが成長していく様子を感じると同時に、自身も生き生きと躍動し、こどもと一緒の生

活の中で発見を重ねている実感があれば、成長というほどの変化とは思えずとも、少なくとも今ここで能動的に、主体的に活躍している生命性に満ちた自分を確認できるだろう。

人間としての育ちの基盤を形成している乳幼児期のこのどもの成長と、その時期を共に過ごし、かけがえのない役割を果たす親の成長は根本的なところで影響を及ぼしあうものであると言えよう。生後一年に満たないうちに「社会的参照」をする能力を身につけるほどの感受性を持つ人間のこのどもが、自身の自我を形成するときに親の自我の状態や人格的な強さを参照すると考えるのには無理があるだろうか。

また、親がこのどもの成長を理解したり、援助したりするプロセスは、親自身の人間理解の深まりや新しい経験をもたらす機会でもある。親の成長は子育てが一段落するまで成果の無いものではなく、このどもの成長とシンクロして、相互に影響しあいながら生き生きと生起する事象なのではないだろうか。

辛い儀式

ある幼稚園が設置している未就園児のクラスに三歳で参加し始めたA男。以前(二歳時に)参加していた音楽教室で、母親から少しも離れることができず、ずっと泣いていたという。家では何でもよくできて、聡明で活発、困ることなど何もないA男の姿を見てきた母親にとって、泣いてぐずるA男の姿は非常に心外なものだったのだろう。これではとても幼稚園は無理だと思い、未就園児のクラスに参加することにしたという。

今度こそ、と熱い期待をもって参加してきた話すのだが、やはり少しでも母親が保育室から外に出ようとすると(注)、泣いて引き止める。母親があまりにためて保育室に留まると、ようやく安心して保育者と熱心に遊び始める。

参加の回を重ねたある朝、他のこのどもたちはすんなりと母親と別れている(ようにみえる)のに、A



男は泣きそうになって母親の手を離さない。母親は苛立ち、「どうしてそうなの?」「ほら、おうちで約束したでしょ」と、「両手でタッチ」という儀式をして別れようとする。こどもはうなずいて言われるままにそれをやっつてはみるものの、やはり出て行くとする母親の手を引かずにはいられない。

保育者は母親に、A男がここで楽しく遊ぶことができるためには、今しばらくお母さんの存在が必要であることを伝え、A男がもういいと思うまで腰をすえて保育室に留まることを勧める。この時母親の落胆は大きく、他の母親達に、ここの保育者はA男

の母子分離を支えてくれないと非難していた。少しくらい泣いても、先生がA男をしっかり受け取ってくれさえすればすぐにこどもは慣れて遊び始めるのに、と納得いかない様子であった。同時にA男がこんな様子なのは自分の育て方が悪かったせいなのだろうか、いつまで続くのか、本当に離れられるようになるのか、と保育者に問いかけ、このことで自身の母親にA男の育て方を非難されている辛さをも訴えてきた。

実は保育者の側でも、A男の様子から、この人は母親と離れてそれこそ最初は少し泣いていても、すぐに保育者との関係を築いて、安心して遊び始めることができるだろうと見ていた。しかしここで、少し泣いても“をよしとして、A男を保育者が引き受けてしまうことは、むしろ母親にとってもつたいないことだと考えた。母親にとっては今しか経験できない、A男の育ちと同時に自分の育ちを実感できる機会だと考えたのである。

そこで保育者は母親に、A男の育ちに何の心配も問題もないことを伝え、そうであっても、今A男が必要としている安心の手がかりを提供することがA男にとっては何より大事なのだという話を話す。

母親は保育者の言葉に納得しかねたまま、保育室を出る他の母親達に「うちはまだだめなのよお」「(出られて)いいなあ」などと声をかけていた。保育室に留まりながらも、彼女の表情は硬く、A男を見つめるまなざしも曇りがちであった。しかし次第に自分が部屋にいさえすれば、様々なことに興味を示して熱心に遊び、帰る時には満足して、ああ面白かった! と頬を上気させているA男の姿に、母親もこれでいいのかな、と思い始めた様子であった。

ひと月もすると、A男は朝からすぐに夢中になって遊び始め、母親を忘れるくらいになる。母親はすでに夢中で遊んでいるA男に近寄っていき、頬に軽く触れて、じゃあまたあとでお迎えに来るね、と保育室を出て行く。その後も、時にはA男は母親の手

を引き、行くな、の合図をしてくることもある。母親は「あれ? 今日は一緒にいて欲しいの?」とむしろ面白がっている。「じゃあ、もうしばらくいいね」とか「あそこまでお母さんをお見送りしてくない?」など鷹揚に、臨機応変にA男に応じている。別れのための辛い儀式はもう跡形もない。

こどもの自我が必要としている支えを、親が提供できないとき、こどもは親の自我の弱さや混乱を感じ取るであろう。自分を支えることのできない大人からは参照すべき自我のモデルを得られない。親が自覚的にこどもを支えようと、自ら自我を強めていくとき、こどもはそれを感じ取って安定し、成長をとげるのではないだろうか。この時のA男にとってはお母さんはいてくれるだけでいい、のだ。

二歳と三歳の境目

未就園児のクラスを二歳と三歳で分けて試行したこの年、親達のクラスへの期待の違いが顕著であつ

た。単に一回の経験から安易な推測は避けるべきであるが、親の育ちに関心寄せるものとして、こどもの二歳の一年間は、親自身にとっても成長の方向性が定まる時期に当たるとはならないかということを考えてみたいと思っている。

この年のクラスの、という限定の中でそれぞれの特色をあげてみる。

二歳のクラスでは親達はこどもと共に初めて家庭外の社会的存在である集団に参加する人が多く、自分のこれまでの子育ての成果が検証されるかのような緊張感を持っている。クラスへの期待は親子共に温かく受け入れられること、こどもと一緒に新しく心地よい人間関係を築くこと、こどもとの生活に新しい経験内容を得ること、などである。もちろんこどもへの期待は別にあり、友達に関心を示すか、集団に参加できるかなどが主要な関心事である。

三歳のクラスではすでに二歳時に（あるいはそれ以降継続して）音楽教室や英語教室、体操教室など

にこどもを参加させている親が多い。多くの人のとって未就園児クラスは幼稚園への入園準備という位置づけである。このクラスに対する親の期待はこどもの能力の増大につながる活動内容であること、に集約されてくる。様々な教材の使用を通しての知識・技術の拡大、保育者の指導を通して集中力・根気・自制心が育つことなどである。二歳のクラスで見られる「親子共に」の感覚はすでに影を潜めている。こどもに教育の成果が現れない場合、こどもへの苛立ちと指導者に対する不信が生じる。

二歳のクラスの親達が抱く期待はこちらも予想している範囲であり、提供していく活動内容とも充分呼応するものである。しかし三歳クラスで直面した親の期待には正直なところ非常に困惑させられた。三歳クラスの親はすでに、こどもの二歳時に様々な幼児教育サービス産業を利用した経験がある。未就園児クラスもそのひとつとして、親のニーズに応じて利用可能なものであり、クラスへの参加は親の選

扱による消費行動のひとつである。社会的にはそういう位置づけになっている現実があるが、しかし私たちがこのクラスで実現したいのは親も子どもも共に生き生きと育つための基盤作りである。親として子どもの一番近くにいる子どもの幼児期に、子どもの必要を理解し、子どもを支えることを実際にやっ歩いていく中で、親自身もまた自分らしく成長することを実感してもらいたい。

体験の内容としての育ち

親の育ちとして私がイメージするのは、必ずしもその人の氣質が親らしいものに変化することではない。外側から測りうる変化というよりも、体験の内容を問いたい。他者としての子どもを理解する経験―理解に至るまでの苦闘も含めて―の蓄積、子どもとの実際のやりとりの中で親自身の行為を工夫したり、相手に応じて変化させたりする経験、子どもをめぐって関わりをもつ様々な人と率直で建設的な関

係を構築する経験、それらを通じて自身の個性をより社会的な場で自由に発揮していく経験、などである。見た目にはその人に何の変化もないかもしれないが、子どもの躍動する生命性に呼応する大人の生命性が見出されるのではないだろうか。生き生きと育つ子どもの側には、生き生きと育つ親がいる。保育者の幸福はそういう両者と共にあることだ。

(鎌倉女子大学)

注 この園が設置する未就園児のクラスでは親子で一緒に過ごすことを重視しているが、A男が参加していたクラスは、幼稚園の年少クラスに相当する年齢の子どもたちだけで構成されており、子どもが幼稚園で経験する生活内容との対応を試行していたため、子どもたちが親から離れて保育者と過ごす時間を段階的に導入した。